

Fact Sheet

佐藤志津

——横井玉子の意志を引き継ぎ、女子美を発展させた人物 ①

生い立ち

佐藤志津は、嘉永4(1851)年山口舜海(医師・二代目順天堂堂主)の娘として常陸国行方郡麻生(現・茨城県行方市麻生)に生まれた。父は志津が幼少の頃、佐藤泰然(医師・初代順天堂堂主)の養子となり、佐藤尚中と名を改めた。父が養子になったことで、一家もまた佐藤家にはいったことになる。祖父となった泰然も父も高名な医者であり、佐倉藩主に仕える身であった。佐藤家には、泰然の実子である松本家へ養子に入った松本良順(御典医)や董(林家へ養子・工部大学創始者・後の外務大臣)といったこの時代に活躍した息子たちがいた。また、志津と董は一つ違いだったこともあり、共に佐倉藩の儒者岡本道庵に漢籍、浜野末東に国学を学んだ。



佐藤志津 鹿鳴館舞踏会の頃

教養

安政6(1859)年、志津は母方の叔母の嫁ぎ先である水戸の酒造家、藤枝富右衛門の家に預けられた。叔母夫婦はとても志津をかわいがった。志津は、9歳で水戸藩の武術指南平方彦八郎より穴沢流の薙刀を習う他、点茶・琴曲・手芸・礼法といった様々な教養を身につけた。特に薙刀の稽古が気に入っていたようである。元治元(1864)年、志津は佐倉藩主の堀田正睦息女、松姫の警護を兼ねたお相手として佐倉に戻った。そこで松姫と共に茶道・読書・書道・和歌など、武家の女性にとって必要な作法を身につけた。こうして上流社会の教養を身につけたのだが、病身の母を助けるために御殿を後にした。

(裏面につづく)

女性の実業教育のはじまり
「チャレンジした女性たち」

Fact Sheet

志津と進

母の死後、家族の世話や佐倉順天堂病院の切り盛りを一手に引き受けた志津は、慶応3(1867)年、佐倉順天堂の塾生で父に才能を見込まれた高和東之助(後に進と改名)を婿に迎えた。そして間もなく、進は明治2(1869)年ドイツに留学し、同8(1875)年に帰国した。日本で出迎えた志津は、夫の留学経験談から影響を受けた。志津は、赤十字の奉仕活動からなる婦人会活動で女性の自立支援を積極的に行った。志津が援助した中には、高橋瑞子(医師)や吉岡彌生(医師、現・東京女子医科大学創設者)もいる。

明治9(1876)年、志津夫婦に息子の昇が誕生した。その翌年、西南戦争が起こり、進は陸軍臨時病院委員長に命じられ大阪へ出向した。また、明治15(1882)年に父・尚中が亡くなると進が順天堂病院院長に就任した。これにより志津は院長夫人となった。翌年に開館した鹿鳴館で志津は社交性を発揮し、人脈を広げていった。その後、進は医師としてますます活躍、佐藤家や順天堂の社会的知名度は順調に全国に広まっていく。

玉子と志津

夫婦共に社会貢献をしていた志津のもとに玉子から私立女子美術学校への援助依頼が舞い込んだ。志津は、玉子の学校存続にかけける情熱や女子教育への強い思いにより、家族の反対を押しきる形で同校の開校翌年に救済に乗り出し、校主となった。また病身の玉子を順天堂病院へ入院させ、自らが看病をした。しかし間もなく玉子は回復することなく逝去した。志津は、玉子の功績を称えて当時では非常に珍しい学園葬を行い、多くの学生や生前親しくしていた人々に玉子は見送られた。女性が学校葬で見送られることは、大変珍しいことで、当時の新聞にも取り上げられた。こうした志津の心遣いはその後の学校経営の中でも発揮される。

玉子の死後、志津は藤田文蔵と力をあわせて私立女子美術学校の再建に着手する。そして、明治37(1904)年、文蔵が校長を退職した後、志津が校主と校長を兼任し、同校の運営を完全に引き継いだ。志津は、校務と並行して自らも教壇に立ち、修身や作法を教えた。また、玉子が大切にしていた寄宿舎教育を大切にし、寄宿舎にて生徒たちと寝食を共にすることもあった。

(女子美術大学歴史資料室・吉田麻里)

(写真所蔵:女子美術大学歴史資料室)

女性の実業教育のはじまり
〜チャレンジした女性たち〜

Fact Sheet

佐藤志津

——横井玉子の意志を引き継ぎ、女子美を発展させた人物 ②

志津の奮闘

志津や学校教職員の努力により学校経営は徐々に上向いていったのだが、二度目の危機が訪れる。明治41(1908)年、校舎2階の裁縫室より出火があり、校舎は全焼、寄宿舍も大半が焼ける大火事となった。当時の新聞にも火災の様子が大きく取り上げられたほどのもので、以前より志津の学校経営に難色を示していた進は、志津もこれで諦めがつくであろうと期待していたという。しかし、進の思惑とは裏腹に、志津は、「何事も天命です。人事を以って致すことではありません。しかしこれからの始末は一人ではできません。一同心を合わせ、努力して、この取りかえしをつけていただきたいと思います。」と誰一人責めることなく、迅速に火災の事後処理に当たった。翌年には新しい校舎を菊坂町に建て、授業を再開した。この時の志津の奮闘ぶりをきっかけに進も協力する姿勢をみせていった。



佐藤志津 叙勲の頃

女子美の発展と志津の功績

菊坂に移った女子美術学校は、「菊坂の女子美」という愛称で呼ばれ、発展してゆく。

志津は、玉子が目指した美術教師の養成に対し、明治の教育制度に倣い変革を行った。当時の教員資格は、明治33(1900)年に発布された教員免許令に則り、国立の教員養成のための専門機関である師範学校に付与されていた。例外は特定の高等教育機関のみであった。この特定の高等教育機関とは「高等師範学校女子高等師範学校ノ該当学科ト同等以上ノ程度」の教育科目を開設することが条件であった。これに伴い、志津は、明治40(1907)年に学則を大幅に改正し、私立女子美術学校を各種学校から専門学校に昇格させようとし、菊坂校舎開校直後には各科に高等師範科を設けた。しかし残念ながらこの時点では専門学校には昇格することは叶わず、昭和4(1929)年まで待たねばならなかった。

(裏面につづく)

女性の実業教育のはじまり
〜チャレンジした女性たち〜

Fact Sheet

大正3(1914)年、東京大正博覧会に出品した学生作品が賞状と銀牌を受けた。また翌年開催したパナマ運河開通記念パナマ・パシフィック国際博覧会でも学生作品が金賞を受賞するなど華々しい功績を残した。そしてついに、大正4(1915)年、中等教員無試験検定資格が刺繍と造花科の2科に付与された。これは、当時の各種学校としては異例のことであり、大変名誉なことであった。こうした功績が認められ同年志津は津田梅子(女子英学塾)、矢島楫子(女子学院)、嘉悦孝(女子商業学校)等とともに女子教育功労者として叙勲された。

大正6(1917)年、私立女子美術学校は、個人経営から財団法人私立女子美術学校に学校経営の基盤を整え、進が初代理事長に就任した。その2年後、志津は肺炎にかかり高熱にうなされながらも学校の行く末を心配し、大正8(1919)年3月17日に順天堂病院にて息を引き取った。多くの人に惜しまれ、見送られた志津の死は、大々的に新聞に取り上げられた。

今日の女子美術大学は、私立女子美術学校を創立した代表者の横井玉子と、玉子の意志を引き継ぎ、礎を築いた佐藤志津により創られてきた。玉子と志津の信念は、同校の建学の精神「芸術による女性の自立」「女性の社会的地位の向上」「専門の技術家・美術教師の養成」として今日まで百余年に渡り引き継がれている。

(女子美術大学歴史資料室・吉田麻里)

(写真所蔵:女子美術大学歴史資料室)

女性の実業教育のはじまり
〜チャレンジした女性たち〜